

コロナ禍でも楽しき、私の「マイクロ農業」

定年後に最適なマイクロ農業

2018年から私は、群馬県昭和村にある「道の駅あぐりーむ昭和」が運営する10坪ほどの畑で、「マイクロ農業」を始めました。マイクロ農業というのは本格的な農業にはおよびもつかないけれど、家庭菜園よりは、ちょっとだけ本格的な農業のことです。そこで私はトマト、キュウリ、ナス、ピーマン、ジャガイモ、落花生など、10種類以上の野菜を育てました。

もともとやりたいなとは思っていたのですが、仕事で一日も休めない月が多かったため、あきらめていました。ところが、60歳を過ぎて、日曜日の仕事が減ってきたことと、私が畑に行けないときは、道の駅の駅長が、面倒を見てくれるという約束をしてくれたので、思い切って

挑戦することにしたのです。

小さな貸し農園なのですが、その面積でも農業は大変です。実際には、道の駅のスタッフが農地の整備をして、種や苗まで準備したうえに、農作業の指導をしてくれました。道の駅の人が、土や苗など全部用意してくださっていたことに、あとで気づきました。

それでも、慣れない農作業は苦勞が絶えません。ただ、大自然のなかで、土をいじっているだけで気持ちがいいですし、作物が少しずつ育っていく様子を見るのは、子育てとも似たような喜びがあるのです。

さらに、マイクロ農業には、思わぬ効果がありました。それは、足腰がとても鍛えられるということです。私の畑では、いっさい農薬を使っていません。2週間も放っておくと、雑草が生い茂ってしまうのです。それを、作物を傷つけないように、手作業で1本1本抜いていく作業は、とても大変です。私の場合、必死で作業をしても、完了まで3時間ほどかかってしまいます。私は、草抜きを立ったままやっているのです、姿勢としては、中腰になります。その結果、太ももの筋肉に大きな負荷がかかるのです。

つまり草抜きの作業は、私にとって、スクワットをやっているのと同じだということになります。それを3時間続けるのですから、ジムに3回通ってやる運動を1回でやるようなものです。実際、最初の本格的草抜きの後は、3日間ともに歩けませんでした。ただ、老化は足か

らやってくると言います。足腰を鍛えるためにも、マイクロ農業がおすすめのなのです。

コロナ禍で、昭和村から新たな農地探し

昭和村には、毎週高速道路を1時間かけて行き来していました。仕事があるので、多いときでも週に一度しか出かけられないのですが、ここは土にも恵まれた土地で、赤城山が噴火したときの溶岩が細かくなって土に含まれているので、水はけがいいのに水保もちがよく、畑仕事に絶好の土地、「やさしい王国」と呼ばれる所以です。道の駅には、地元の農産物がたくさん並んでいます。道の駅の駅長さんとも仲良くなりました。

「やりませんか？」と声をかけてくれた駅長が、私が行けないときにも、水やりや草むしりを代わりにやってくれていましたし、プロの農家が畑の整備と苗や種の準備、そして農作業のあらゆるアドバイスをしてくれるので、10坪くらいの狭い畑でも、家族では消費しきれないほどたくさん収穫がありました。

ところが、2020年は新型コロナウイルスの影響で「東京近辺からは来ないで」と県間移動の自粛が求められ、昭和村の畑に行けなくなっていました。

「せっかくやり始めたのに、どうしよう？」と思っていたところ、妻が近所の使われていない土地を探し、農家に頼み込んで、家から徒歩3分のところに20坪ほどの畑を借りられることに

なりました。

本物の農家がやっている面積と比べたら、とてつもなく小さな規模です。それくらいなら、昭和村の経験でうまくできると思っていたのですが、予想以上に大変な作業でした。土は硬いし、畑の整備もたいへん。鍬一本で畑を耕し、石灰を入れ、堆肥を入れ、最後に肥料を入れていきます。これが結構な運動量で、日頃の運動不足が一挙に解消されます。

でも作業はこれだけではありません。悪戦苦闘している私を見て、まわりの人が耕耘機（種・苗・肥料などまで）を貸してくれました。機械の力はすごい……実際に耕耘機を使うと、2週間かかった作業が30分で終わりました。農家の人がなぜ農業機械を欲しがるのかよくわかりました。

そんなおり、農地を貸してくれた農家のおじいさんが亡くなってしまったのです。とてつもない相続税がかかるので畑は売らざるを得ないことになり、一部だけでも私が買おうと思いましたが、そう簡単ではありませんでした。いまの国の制度では、農地を買うには「農家」にならなければならないのです。「農家」であることの条件は後で述べますが、私の場合は農家に「転業」するわけにもいかず、やむなく諦めました。

愛着のあるこの土地を使えなくなってしまう、冬を越すべき野菜は植えられなくなったのですが、農作業をしている間に周囲の畑の人とも仲良くなったおかげで、「もうすぐあそこの土

地が空きそうだから、そっちを借りませんか？」と声をかけてもらい、30坪ほどの土地を借りることができたという次第です。

こうしていま、30坪ほどの土地を耕しています。雑草は一晩で伸びます。手がまわらないくらいの作業となり、毎日行かざるをえなくなっていました。

大地と向き合うよろこび

おかげで、私のライフスタイルががらりと変わりました。新型コロナウイルスによる自粛要請もあって、生放送対応のため週に2〜3日、短時間だけ東京に出かけるほかは、ずっと埼玉の家にいます。40年前に就職してから、初めての経験です。はからずも、定年退職後の生活を疑似体験することになったというわけです。

自粛生活で暇を持て余しているという人も多いのですが、私はとても忙しく過ごしています。晴れた日には畑に出て、雨の日には自分で開設した「B宝館」という博物館（72ページ参照）で展示物の整理をしているからです。

毎朝、3時間ほどの農作業が増え、完全に朝方人間になりました。農作業中は、「マスクしないでもいい」「空気よし」「水おいしい」そして、「何より楽しい！」のです。

その後、近所の農協や園芸店、ホームセンターで野菜の苗を買って植え始めたのですが、自

肅期間に野菜作りをしようと思う人が増えたらしく、よい苗が手に入らなくなってしまいました。そこで種から育てることにしたのですが、なかなか思い通りにはいきません。肥料や水は多すぎてもいけないし、少なすぎてもうまくいかないのです。しかも大雨や強風に襲われたり、虫に食われたり、病気が出たりします。ありとあらゆる困難が立ちはだかります。

でもそこで、私は考えました。「これまでまったくやったことのないことに一から取り組むなんて、なんて素晴らしいんだろう！」と。それはいままでにはない経験でした。これまでにやってきた執筆や講演生活とは無縁の、直に大地と向かい合うよろこびが得られたのです。

作物を種から育てようと、腐葉土を入れたポットに大豆の種を播^{*}いて、苗を自宅の庭で作ったのですが、ポットの数に限りがあったので、3分の2くらいの種は畑に直播^{*}しました。ところが、自宅の苗は順調に育ったのですが、畑のほうは一向に芽を出しません。なぜだろうと不思議だったので、原因がわかりました。ある日の夕方、畑で数株の大豆が芽を出していました。ところが翌日の早朝に畑に行ってみると、新芽は跡形もなく消えていました。鳥に食べられてしまったのです。

豆類は、発芽した当初はまだ「豆っぽい」ので、鳥の楽園の畑では、格好の餌食になってしまふのです。鳥は、相当賢くて、落花生の種も5粒播^{*}いたのですが、そのうち3粒は掘り返されて、食べられてしまいました。その他、正体不明の動物に畑を掘り返されるやら、キャベツ

が片っ端から虫に食われるやら、農業は動物との闘いでもあります。

そうした困難を克服しながら、最後に収穫までたどり着いたときのよろこびは、山登りにも似ています。

農作業は、思い通りにならないから楽しい！

私が近所で畑を始めてから一番変わったのは、近所の人とのコミュニケーションが増えたことです。畑をいじっていると、通りかかった近所の人が声をかけてくれるのです。日々育っていく作物の変化を見るのは、彼らも楽しみのようで、話がはずみます。

まわりには、定年後、私と同じようにマイクロ農業をしている人たちが何人もいて、彼らとの交流もできました。育て方のアドバイスをくれたり、野菜の種や苗を分けてくれたりします。作物も「穫れすぎちゃったから」といって分けてくれます。

定年後の楽しみで畑をやっている先輩たちに、なぜ畑をずっとやっているのか話を聞くと、農業の面白さは二つあると言います。

一つは、野菜を作るのはとても難しく、自分の思い通りにならないことです。自然が相手ですから、いくら習熟していても、成功率はせいぜい3分の2くらいだと言います。ホウレンソウやトウモロコシは、ほぼ100%発芽しますが、なかなか育ちません。2020年の夏は

雨が降らず、夏の最盛期に播いた秋野菜の種はほぼ全滅でした。

でも、うまくいかないから必死に考えます。いろいろな知恵を使って、柔軟に対策を講じていかなければ、農業はできないのです。そして手をかければかけるほど、立派に作物が育っていきます。先輩たちに聞くと、皆、違うことを言うのが面白いところです。例えば、大豆は種から植えるか、苗からか、それとも分けてバラしてから植えるか、束ねたまま植えるか。あるいは、ちよつと芽が出たのを切ってやったほうが育ちやすい……など、それぞれの工夫がよく現れていて、聞いていてあきません。

2020年はスイカが一番の成功でした。スイカの苗をいただいたので植えたのですが、本来の植え付け時期よりかなり遅れた6月のことでした。7月は晴れた日がたった1日しかなく、苗をくれた方がその晴れた日の朝に人工授粉してくれました。ところが8月になると連日晴天が続き、出遅れた我が家のスイカは、その日差しをいっぱいを受けて育ったのです。その結果、1本の苗から10個も収穫でき、しかも真っ赤で、糖度も高い美味しいスイカになったのです。地主さんにおすそ分けしたら、「どこかから買ってきたの?」と言ってくれたほどのレベルでした。

昭和村のときと同じように、まわりの人に力をいただいで収穫できたものなので、うれしさもひとしおです。

売り物ではないので、一円も儲かってはいません。我が家だけでは食べきれないので、まわりに配っているだけです。でも、すごく楽しい。友人の漫画家・倉田真由美さんが、「森永さんの農業は金持ちの道楽」と言っていました。確かに道楽です。収穫した作物が食べられるという典型的な「地産地消」いや「自産自消」だけでなく、畑仕事は体のトレーニングになるからです。私はライザップに通っているので、定期的にジムでトレーニングを続けてきました。それ以上に、農業を始めたことで最大級の筋肉を手に入れることができました。畑の草むしりは、ほぼスクワット、鍬を振るう作業は、格好の背筋トレーニングになるのです。

すべてを自分で決められる「農業はアートだ！」

もう一つの楽しみは、全部を自分で決められるということです。サラリーマン生活は、思い通りにならないことの連続です。でも、多少理不尽と感^いじても唯々^{だくだく}と従うしかありません。だから「給料は我慢料」だと言われるのです。それと比べると農業は、すべて自分の考え通りに事を運べます。それが楽しいのです。

また、よく「畑を借りるときにいくら地代を払っているんですか」と聞かれるのですが、地代なんてありません。農家にあいさつに行ったり、たくさん穫れた作物を持って行ったりするだけ。つまり、現代人が生きていくために従わざるを得ない「資本主義の論理」とは無関係で

いられるのです。

それだけではありません。最大のメリットは、まわりに住む人たちがみな、自分たちと同じ階層の人たちばかり。私と同じような「庶民」だということです。分不相応の、余計な見栄の張り合いをする必要がありません。「公園デビュー」や「お受験」とは無縁の生活が送れます。

そのほかにも、早寝早起きが身につきますし、適度な運動にもなるので、とても健康的です。老後の生活設計に農業を組み入れてみてはいかがでしょうか。

ちなみに、若い人であれば、都会と田舎の間にある所沢市や入間市のような「トカイナカ」ではなく、完全な田舎暮らしにチャレンジしてもいいと思います。自治体が移住のための助成金を支給してくれるところもありますし、一定期間住むことを条件に、家を提供してくれるところもあります。

実は、実際にそれを使って移住し、そこで起業するビジネスパーソンも少なくありません。彼らは「自給自足」を実践するかたわら、起業が軌道に乗るまでの間、近くの企業で働くなどして生活費を稼いでいます。思い切って新天地に飛び込むのも、選択肢の一つだと思いますが、これについては後の章で紹介いたします。

マイクロ農業は最大の「セーフティネット」

昔は多くの人が農業をやっていました。自分の食べるものは自分で作るのが当たり前だったからです。輸入していた食料もありましたが、それは自分たちで作るための環境がなかったからで、量もわずかでした。

それが次第に工業化に伴い、国際分業やグローバルイズムという考えが一般化され、日本は工業製品をたくさん売って外貨を稼ぎ、そのお金で海外から安い農産物を買うことが効率的という考えに変わっていったのです。そして、次第に人々は農業に見向きもしなくなり、農業は「きつい」「汚い」「かっこ悪い」の3K（「かっこ悪い」でなく「危険」が本来の意味です）の代名詞のような職業になっていきました。しかも「儲からない!」。だから高度成長期に多くの人が農村を離れ、都会に出て行ったのだと思います。

確かに農業で経済的な豊かさを実現するのはかなり難しい。でも時代は変わってきました。経済成長に翳りが見え、社会の将来に不安の影が射しています。

「国家の借金総額が1000兆円を超え、毎年の国家予算の10年分」なんて話を聞くと、やはり不安になります。もともと、この問題に関しては、そう不安がることはありません。自国の通貨が発行できる国家が破綻することはありません。これは財務省も認めることですし、日銀が国債を400兆円以上買い取って、事実上、借金を帳消しにしているので、あまり心配することは無いのです。

でもこれに付随して、年金問題も浮上していますし、「不況知らず」の公務員ですら、リストラの波が押し寄せて身分が危うくなり、一方で非正規の公務員が増えています。かつての「役人天国」ですら足元が揺らいでいるのですから、「日本は大丈夫」と安穩としているわけにはいきません。

そんな時代に、日本は今後も安定して海外から食料を輸入できるといふ保証はどこにもありません。世界人口の急速な増加と各地で頻発する異常気象により、いつ食料不足が起ころかわからない時代です。「飽食の時代」なんて言っていられるのは、いまのうちだけかもしれないのです。

食品ロスも大きな問題です。日本の食料自給率は4割を切っているのに、日本人は平気で食べ物を捨てています。日本が出す食品ロスは年間約700万トンもあります。国民全員が、毎日茶碗一杯分の食品を捨てている勘定になります。その反面、世界には食べるものにも困ったり、飢えで苦しんだりする人が大勢います。もし先進国が食料廃棄物を出さなければ、世界から飢える人はいなくなるのです。

日本は長年にわたる減反政策で、水田の休耕地が増えています。ですが本来、日本は豊かな農業生産力を持つ国なのです。立派な田畑もあり、技術力も高い。そんな日本が、世界の農作物を買い漁ったら、本当に困るのは発展途上の国々です。品不足になるし、価格もつり上がっ

て、手に入れることができなくなってしまう。

安いからといって農産物を海外から輸入し、その挙句、食べ物を粗末にしている姿……これとはとても恥ずかしいことなのではないでしょうか。

そうした一連の「悩み事」を解決する手段が「マイクロ農業」です。消費者が可能な限りの「地産地消」「自産自消」を心がけ、ささやかながらも、日本の農業を支えていくこと。たとえ一つひとつは小さくても、それが集まれば、いずれ世界の食料問題解決へとつながっていくのではないかと思います。

実際に作物を育てていると、「食」というものに身近に向き合うことができ、目を開かされます。私が、店頭に並んでいる野菜の「不自然さ」に気づいたのは、自分で農業を始めてからのことです。私が育てたキュウリがまっすぐになることは、減多にありません。ナスも3割くらいは変形しています。でも形は悪くても、食べるにはなんの問題もありません。

これを見て私は、店頭に並べるまっすぐなキュウリやナスを作るために、農家の人がどれほど苦労しているかを知りました。専業農家は、私のように有機無農薬で野菜を育てるなんてことは、なかなかできません。特に薬物は片っ端から虫に食われるから、農薬が必須なのです。虫に食われた野菜は高く売れませんが、ビジネスにはならないのです。

でもそのなかで、少しでも農薬を減らそうとしたり、見栄えのよい作物を作るために努力す

る。それが農家の仕事だと言ってしまうと、その裏側で、店頭には並ばない作物が大量に出るのです。そんな作物だつてせっかくの大地の恵みなのに、廃棄されてしまうことが少なくないのです。

農薬をいっさい使わない野菜は、大地の香りがします。スーパーで売られている野菜には、その香りがありません。いまの若い人は、その香りが嫌だということかもしれませんが、私はその香りこそ大地の「滋味」であり、作つた人の努力の結晶のような気がします。

いま、都会で暮らしている人は、自分が食べるものがどう作られているのかを知らない人がほとんどでしょう。「近頃の子どもは、魚はスーパーに並ぶパックの切り身の姿で泳いでいると思っているんじゃないか」というジョークがありますが、まんざら笑い話でもありません。

人間にとって「食」は最も重要なもの、農業はその「食」の根源に携わる仕事なのです。自分で食べるものを100%他人まかせにしていると、いざというときに危うくなります。「食」は生命維持の源なのですから。

「身土不二」という言葉があります。人は自分が住んでいる土地でとれる旬なものを食べることで、体の健康にも自然にとつてもいいということです。「地産地消」です。マイク口農業は、これをさらに一歩進めた「自産自消」なのです。

もちろん、それだけで生活することはできませんが、せめて近隣で穫れたものを食べ、それ

が無理なら国産のものを食べるようにしたいものです。そのためには日本の農業をもっと盛り上げるように、応援していかなければなりません。

マイクロ農業は、単に「自産自消」という楽しみだけでなく、「食」に目覚めることで、日本の農業が抱える問題を直視するきっかけにもなるのです。

農業は「命の循環」につながる

コロナ禍で、全世界的に、人々の生き方が変化しました。いや、変わらざるを得なかったというほうが正しいでしょう。2021年2月22日現在で世界の累計感染者は約1億1137万人、死者は約247万人となりました。命だけでなく、見えない脅威の前に職を失う人たちも続出しました。

そんな人たちの間で、密かに高まっているのが「地方移住熱」と、それに伴う「農業熱」です。理由はテレワークが広がったからです。「3密」を避けるために出勤をやめ、在宅テレワークをやってみると、多くの仕事がおオンラインで完結することがわかりました。もちろん、現業に従事する人はこの限りではありませんが、ビジネスマンの多くが「これまで満員電車で通っていたのは何だったんだ？」という思いを抱いたはずです。

テレワークが今後、完全に定着するかどうか、即断はできませんが、「脱ハンコ」の風潮も